

《父の背中と、正義の胸中》



おかえりなさい。
あなたが原初世界に渡る前に、もう一度ここを訪れると思って待っていました。
もう色々と挨拶も済まされていると思いますが、ここでの出来事を覚えていてくれて私は嬉しく思います。
あなたのお目当ては、ハンナさんですね。今日もいらっしゃってますよ。どうぞ、螺旋階段を上がって参りましょう。
おや、今日はギャラリーが多いようですね。モーレンさんの他に、ルビーレッドの可愛らしい女の子と、あれは……ベーク=ラグさんですね。珍しい方がいらっしゃいます。

「……ああ、ようこそ博物陳列館へ。今日は賑やかですね」

「あ、あなたも歴史の勉強に……？」

リーンはテーブルに何冊もの本を積み上げて読書の最中のよう。あなたが来たことに気が付いて、本を閉じてからこちらへやってきました。

「妖精王からことの顛末は聞いておるぞ。水晶公も含め、皆が無事で本当に良かった……」

ベーク=ラグさんはどうやら、しばらくクリスタリウムに身を寄せるようです。

「私は、サンクレッドからもっと多くの知識を学べと言われて……。モーレンさんなら色々力を貸してくれるとのことだったので、お世話になっています」

「言葉や知識は、時代とともに移り変わっていく……。それを実感したからこそ、この博物陳列館のことも、今まで以上に愛おしく思っています。ここに積み重ねられた、氾濫前の世界の断片。光と闇の戦士の英雄譚や、水晶公というお方がいたこと……。それらが、未来の求める者のもとへ、どうか届きますように。サンクレッドさんが、リーンさんにこの場所のことを勧めてくださってとても嬉しく思っていますよ」

夜を取り戻し、平和が訪れたクリスタリムのなんと穏やかなことでしょう。

殺伐とした表情は誰一人としてなく、平和を享受するような横顔を皆は見せてくれています。

「本日は、いかがなさいますか？ ……いえ、きっと彼女ですね。あなたはもう、ハンナさんの朗読のファンですから。ハンナさん！」

「……あら、ごきげんよう。もうあちらの世界へ戻ってしまったと思ってましたが、ご挨拶に来てくれたのでしょうか」

リン……。ハンナさんの足音が、真空管の中を通過して脳内に再生されるかのような音質で鳴り響きます。なんとも不思議な感覚です。

「私の朗読を……？ 良いですよ。モーレンさん、今回はどんな本ですか？」

「そうそう、今回も新刊です。あるいはひょっとして、サンクレッドさんはこの為にリーンさんを……」

「え？ どういう、ことですか？」

「この本……書き手は、サンクレッドさんですね」

ハンナさんは流し目であなたを見ながらほくそ笑みます。

そんなハンナさんを見ながら、モーレンさんが続けます。

「あなたがサンクレッドさんと合流する前、そしてリーンさん。あなたが救出される少し前のお話でもあります。彼の人の正義はどこにあったのか……。果たしてあの死体は本当にあの人のものだったのか……。己の正義を内に問う、父の背中を追い続けた少年の物語」

「わ、私も知りたいです！ サンクレッドが私と会う前の出来事……」

「そうですね、今回は特別授業です！ ハンナさんの朗読をリーンさんも一緒に聞くと良いでしょう。そして、思考してください。舞台は、ユールモアの足元にある貧民街。上の世界への憧れを捨てきれずに、まるで蜘蛛の糸を待ち焦がれるゲートタウン。そこに現れる、顔のない死体……。タイトルは”父の背中と、正義の胸中”」

「……いいえ、モーレンさん。きっとこの胸中の読み方はGyges。正義を問う小さな胸の内に、果たして答えは宿るのでしょうか……。私も読むのが楽しみです！」

「ええ、ええ！ さすがはハンナさんです。リーンさんも、お好きな席にお座りください。おや、あなたは少し難しい表情をされていますね。前回の朗読がよほど味わい深かったと」

「ふふ。さしずめ、私は信頼できない語り手……。でしょうか。カードの種類にも色々ありますよ。どうかゆめゆめ、お楽しみください」

モーレンさんは一つ微笑むと、不思議な球体の機械がある方へベーク=ラグさんと戻っていきました。前回同様、モーレンさんもベーク=ラグさんも観客として聞こえる位置にいます。

みなさんが思い思いの場所へ移動すると、ハンナさんは表紙をめくりました。

「それでは、始めましょう。父の背中と、正義のギュゲス」

舞台は、ノルブランドにおいて最大の面積を誇るコルシア島。

その大半を領有する悦楽都市、ユールモアを空に臨む場所。

比較的この地域は、罪喰いの被害が少ないとされていて、身の安全を求めて多くの難民たちが押し寄せているといいます。

しかし、必ずしも身の安全が保障されるかといえはそうでもありません。

今のあなたなら、コルシア島の……。ユールモアという悦楽都市がどんな世界だったのかを知っているはずです。光の氾濫によって世界が滅びようとしている最中、抵抗せずに最後の瞬間まで怠惰に暮らす人々が集まっている場所だったのです。

20年前、元首が交代したことにより、かつては強力な軍隊によって罪喰いと戦いの先頭に立っていた強国は、享楽に溺れてしまいました。

自由市民権を持つ富豪たちは享楽に溺れ、労働市民権を持つものはいつ自分がお払い箱になるか、怯えながら生活している者もいるそうです。

ユールモアの市民は、厳格に身分が区別されています。時には、必要になった技術をもつ者を外界から採ってきて、労働市民権を与える……そのようなこともあるようです。

サンクレッドさんは、ユールモアのことを調べる中で、ある一つのことを気になりコルシア島にやってきたのでした。かつて、罪喰いと戦いのなかでとある少女が軍事利用されているというのです。

その少女はいずこからか現れ、軍を導き、戦いの中で果てる。しかし時が流れると、また同じ姿をした少女が現れ、ユールモアと共に戦い、戦争の中で果てたのでした。

その少女の名は……。

「ミンフィリア……本当に、君なのか……」

転生を繰り返してきた少女。その何代目かの少女は、今もユールモアに囚われています。

その情報をキャッチしたサンクレッドさんは、現地まで赴きユールモアに潜入するための算段を立てているところでした。

ユールモアの麓にあるゲートタウン。そこに向かうために移動している時でした、小さな罪喰いを見つけ村の方へ向かうのを阻止するために、瞬時に討伐。この程度の罪喰いならば、サンクレッドさんの相手ではないでしょう。

すると、それを見ていたであろう若者がサンクレッドさんに声を掛けました。

「あんたやるなあ！ あんたも魔物狩りを？」

「まあそんなところだ。お前は？」

「オレはグランソン。まだ駆け出しだが、そこらの罪喰いにだったら負ける気はしないぜ」

「そうか。この辺りは、他の地域と比べたら罪喰いの数は少ないと聞いていたが、気は抜けないな」

「ああ、だからこそ魔物狩りを生業にするやつも少なくないのさ。

なあ、あんたの名前を覚えてくれないか」

「サンクレッド。あまり長居する気はないんだ、俺はこれで……」

「サンクレッド！ ちょっとオレの村に寄って行ってくれよ。紹介したい人がいる」

「ちょ、ちょっと待て！ どこに連れて行く気だ？」

グランソンに半ば強引に連れていかれたのは、ユールモアから北西にある小さい村でした。

【ブライトクリフ断崖】と呼ばれる非常に大きな段差を背に、小さな麦畑を有しているライト村と呼ばれる場所です。

「ラダー大昇降機。もう20年近く前に廃棄されて動かなくなっちゃったが、昔はタロースを使って動かしてたんだ。この坑道もたくさんのタロース達が荷運びする列をなして、この地域一帯の産業を支えていたんだぜ」

「20年というと、ユールモアの元首が変わった頃だな」

「……まあ、オレはあんな場所に興味は無いがな。来てくれ、こっちだ」

ライト村のすぐ目の前には小さな麦畑が見えます。

そこには、揺れる麦畑の稲穂のような風に遊ばれるポニーテールを携えた女性が居ました。

「よっ、ユーリスちゃん。村長はいるかい？」

「グランソンさん！ 父は相変わらずですよ。お父さーん！」

「なんだ、グランソンと……そちらの方は？」

グランソンは間を取り持って、サンクレッドを紹介しました。

「へえ……腕の立つ剣士ねえ」

「ああ、用心棒は多いに越したことはないだろ？ サンクレッド、めっちゃ強いんだぜ！」

「おい、何の話だ？」

「サンクレッドと言ったかな。私はクリフトル、この村の村長をやっている。近頃、魔物の数が増えてきたようだな……。ユールモアからも庇護下に入れと打診を受けたんだが……」

「この村はオレたちが守る！ サイ・リュクのおっさんもいるし！ だから断ったよな？」

「ああ、だから我が友サイ・リュクやグランソンのような戦えるものかもう少し居てくれても良いという話はしたが……」

「悪いが俺は先を急ぐ。用心棒の件は、引き受けられない」

「はっは、構わんよ。ウチには腕の立つ男たちがいるからな。無理を言ったな、すまないサンクレッド」

クリフトルはもともと期待もしていなかったのでしょうか、グランソンが肩を落とすのも気にせず笑って見せました。

そして、隣にいるユーリスの頭を撫でながら風に揺れる麦の穂に目を落としました。

「……私は、たとえこの荒れた大地になったとしても氾濫前の景色を取り戻したい。もともとライト村は職人の村なのだ。腕の立つ彫金師も、船大工も大勢いた。いつかまた、そんな活気ある村にしたいのだよ。そして、この麦畑はその象徴となる。最高のエールを作って家族や我が友サイ・リュクたち村人全員で乾杯をするんだ」

「そいつは良い話だ。グランソン、この村の護衛はお前に任せるぞ」

「おっし！ スカウトはもうやめた。オレがこの村を守る！」

グランソンが賑やかに拳を空へ突き上げると、村の方からミステル族の肉体派を思わせる男が近寄ってきました。

「騒がしいと思ったらまたお前か、グランソン」

「サイ・リュクのおっさん！ この村はオレたちで守るぜ！」

「当然だ。今日もストーンゲイザーから監視をしていたところだ、ようクリフトル。それと……」

サンクレッドさんは挨拶をしつつ、サイ・リュクの風貌を見て武術の心得があることを認めました。

ライト村は、氾濫前の景色を取り戻したいと願うクリフトル、そして罪喰いから村を守ると豪語するサイ・リュクや若き剣士グランソンという二本の柱があるようです。

すると、グランソンを呼ぶ声が麦畑に届きました。

「あ、ミランダ！ すぐ行く！ それじゃ、また会おうなサンクレッド」

グランソンと親しげに話すヒュム族の女性は、ユーリス曰くグランソンの恋人なのだそうです。もうここに留まる理由のないサンクレッドさんは、クリフトルたちに別れを告げます。

サイ・リュクがふとサンクレッドさんに問いかけました。

「サンクレッドとやら、君は旅をしているのか？」

「そんな所だ。ユールモアに用がある」

「それなら、ゲートタウンを通る必要があるな。シスという男に声を掛けるといい。髪色がオサードブルーのヒュム族だ、サイ・リュクの名前を出してくれて構わない」

「分かった、感謝する。サイ・リュクの旦那」

サンクレッドさんは、サイ・リュクに言われた通りゲートタウンにいるシスという男を探すことにしました。

ゲートタウン入り口に差し掛かると、サイ・リュクさんが言っていた特徴の男性はすぐに見つかりました。早速サンクレッドさんは声を掛けます。

「……あんたは？」

「サンクレッドだ。ライト村のサイ・リュクという旦那から紹介されてきた。シスというのはお前のことか？」

「旦那の客か……いいだろう、俺がシスだ。ここら一帯は、ひでえ臭いがするだろ？ 俺はここに来てからまだ日は浅いんだが、この街のことを知りたけりゃ、教えてやるよ」

「助かる。ユールモアに上がる方法を探している、何か情報はあるか？」

「そう簡単に上がれたら、こんな場所は生まれねえよ。ここはゲートタウン。俺みたいに、ユールモアに入りたくても入れない奴らが、”上”からのおこぼれに与りながら暮らす場所さ」

「おこぼれ……？ この場所は、庇護を受けているのか？」

「ああ。ユールモアの元首、ドンヴァウスリーの庇護下にいるかぎり、このゲートタウンも、罪喰いに襲われる心配はねえ。それに、無償の食料配給まであるんだ……最高だろ？」

「配給か……」

「それでも、いざユールモアに入れば、ここは天と地の生活だぜ。何か特技さえ磨けば、貴人方のお眼鏡にかなう可能性があるんだ。そうすりゃ人材として買われて、奉公することが出来るのさ！ ま、俺は然したる取り柄もないもんで、一向に”上”に行ける気配はねえが、

悪臭に慣れちまえばこの生活も悪かあなさそうだぜ」

サンクレッドさんは考えました。侵入するには警備や設備、様々な障害を突破しなければなりません、この場所には配給によってユーラムアの誰かがやってきたり、何か特技があれば人材として上に買われることもある……。

庇護下であれば、ユーラムアの人間と接触する機会は少ないなりにあるでしょう。しかし、その接点をうまく利用する手はあるかもしれません。潜り込むことはひょっとしたらサンクレッドさんには、容易なことかもしれませんが、あえて相手の人材として潜入することも出来るでしょう。

「……使えるかもな。その配給とやらが来るのは——」

刹那、建物の物陰から飛び出してきた何かはサンクレッドさんの脇を掠め通りました。

その様子を、不思議そうにシスは眺めています。どうやら彼にはその速さに目がついていかなかったようです。

しかしサンクレッドさんには確かに捉えられていました。それが何だったのか、確かめるためにサンクレッドさんはこの場を一度離れることにしました。

「……どうした？」

「いや、すまない。また何かあったら聞きに来る。少し、ゲートタウンの様子を見て回りたいのだが、構わないか？」

「ああ、いいぜ。せいぜいカモられないように気をつけろ。配給があるとはいえ、上に行きたくてウズウズしてる連中ばかりだ。今の配給だけの生活に満足できず飢えている奴もいるだろう」

「……ああ」

そうして、サンクレッドさんはゲートタウンの視察を兼ねて、先ほどの影の正体を探りに行きます。

非常に速いスピードで動くことが出来る影。しかしそれは、人影であることにサンクレッドさんは気づいていたのです。並みのスピードではないことは確かですが、戦いの中に身を置いている者であれば、みやぶることは出来ます。

それでも、サンクレッドさんが一番気になっていたのはそのスピードではありませんでした。その速さを使って、”しようとしていたこと”。

それが何よりもサンクレッドさんの胸中をざわつかせたのです。

ゲートタウンを歩いている最中、その人影は何度もサンクレッドさんに強襲しました。時には胸を掠め、時には腰のあたりを掠め……。

「なんだお前、新参か？ チッ、迷惑なんだよなあ……。上に行くためのライバルが増えるじゃないか……」

ゲートタウンを歩いているとそんな声がささやかれます。その声に反応はせず、サンクレッドさんはさらに奥まで進んでいきました。

そして、歓迎の門まで差し掛かったところでサンクレッドさんの手は人影を捕まえました。

「……ッ！」

「悔しいか……？」

鋭い目で問うサンクレッドさんの気迫に、人影は少年の姿に様変わりしました。

「な、んだ……。お前！」

「そんなことをしていても、俺からはスれないぞ」

「クソ！ オレの父さんは、お前より強いからな！」

「なら、なぜそんなことをしているんだ。お前の正義はどこにある？」

「お前の英雄は、そんなことをお前に教えたのか？」

「ちが……。！ けど、今のオレは……お前より、弱い」

「そんなことをしていたら、いつまでも英雄の背中を追いかけているだけだぞ」

「分かってる！ でもオレは、父さんみたいにデカイ剣が握れない。周りからも、お前は父さんみたいに強くないって……」

サンクレッドさんは、かつての自分を少年の内に見ていました。

少年時代、コソ泥をやっていた過去に、リムサロミンサでルイズワと出会い「その身軽さという天性の才を人の為に使え」と諭され

シャーレアンに連れていかれたといいます。そして新たな名をもらっていたのです。

かつての自分が、目の前にいる……。

今は亡き師、ルイズワの教えを思い出し、サンクレッドさんはこの少年をこのままにはしておけないと思ひ至りました。

「俺もかつてはそうだった。腐っていた俺は、ある地下組織と繋がりコソ泥なんかをやってたんだ。だが、ある人が言ってくれた。お前の力を人の為に使えと……」

「オレに力なんか……」

「自分の弱さを他人のせいにするな。お前の英雄は誰だ、お前の正義はどこにある？」

「オレの、正義……？」

「……その足は俺より疾く走れる。腕の使い方さえ覚えれば、お前は俺より強くなれる」

「本当か!？」

「ああ。その脚を、誰かを助けるために使えるか？」

「も、もちろんだ！ 父さんが居ない今、母さんを守れるのはオレだけだから」

「いいだろう。お前に俺の剣術をくれてやる。……名前は？」

「イール……。英雄ライアンの息子、イールだ！」

それからサンクレッドさんは、イールに稽古をつけるようになりました。

もともと身体能力の高いイールは、サンクレッドさんの教えをどんどん吸収していきました。身体の使い方、身のこなし、体術と体重移動、あらゆる基礎体力を成長させるイールにサンクレッドさんは、しばらくして剣を持たせた修行に切り替えることにしたのでした。

それから2週間ほど経った頃。

剣の扱いにも慣れてきた頃合いを見計らって、ライト村の腕の立つ剣士とイールを引き合わせようとサンクレッドさんは考えました。

ライト村へと赴き、グランソンやサイ・リュクといった実力者たちとも交流を持たせ、対人での稽古を始めることとなります。

初めは遠慮がちだったイールも、気のいいグランソンやサイ・リュクの胸を借りてまたさらに成長していくこととなります。

そんな折、サンクレッドさんはイールと出会ったときに彼が言っていた言葉が気になっていました。イールの父親が居ないというのは、死別なのか、それとも別の理由があるのか。

息子が父親を英雄と呼び慕うことは珍しくありません。だからこそ、その英雄が魔物狩りをするような実力者であったとしても、なかったとしてもどちらとも取れます。

ユーラムアに上がるタイミングも兼ねて、改めてシスのもとを訪れました。

「サンクレッドの旦那、今日もイールの稽古で？」

「ああ。一度イールはライト村に置いてきた。それより、単刀直入に聞きたいのだが、イールの父親についてだ」

「ライアンさんのことなら、ゲートタウンのやつらは全員知ってるぜ。憧れの的、といっても過言じゃねえ。ライアンさんこそ、上に買われてユーラムアに行った張本人だ」

「そうだったのか。特技があればスカウトされるようなことを言っていたな。父親は何を買われたんだ？」

「最近、ドン・ヴァウスリーの発案で、ある罪喰いと人間を戦わせるショー”コロセウム”を始めることになったそうだ。そこで腕利きの戦士が集められた。剣が使えるもの、拳が使えるもの、戦えるやつならなんでもアリってことで、ゲートタウンにも人買いが来たってわけだ。そこで、ちよいと特殊な力を持っていたライアンさんが買われてユーラムアまで上がっていったってわけさ」

「特殊な力……？」

「俺にはよく分からねえが、きっと速く動けるってことなんだろうよ。まるで消えちまうみたいに、瞬時に移動できるというか。腕っぷしも強かったから戦えるだろうと見込まれてコロセウムの戦士としてスカウトされたんだ」

「……消える、か」

「それで、もう数か月になるがライアンさんはいまだ帰ってこない。生きているのか、死んでいるのかさえ分からない状況さ」

「そうか……」

イールの胸中は、複雑なものでしょう。

生きているか死んでいるかもわからない。けど、自分の中の英雄を消さないために”いない”という言葉を使ったのかもしれない。

ライト村で修行に明け暮れるイールに思いを馳せながら、サンク

レッドさんは今一度シスに向き直ります。

「その人買いというのは、いつ現れるんだ？ 定期的なものではないんだらう？」

「そうだな……俺たちもやつらがいつ降りてくるかは分からない。だが、配給のことを考えると近いうちに来るんじゃないかと予想してる」

「何か兆候が？」

「最近、こんな噂が出回ってるのは知ってるか？ そもそも罪喰いが各地に現れることで脅威だが、多くの罪喰いたちは群れを成して移動することが多い。しかし、その中でも単独で行動するやつがいる。それを”はぐれ罪喰い”と呼ぶんだ。さらに大罪喰い並みの力をもつ人型のはぐれ罪喰いが各地で目撃されているらしい。そいつらは、四使徒と呼ばれる」

「四使徒……」

「でだ、どうやらこのはぐれ罪喰い。人為的に生み出されてるんじゃないかって噂だ。ドン・ヴァウスリーがどんな力を持っているか知らないが、やつには全ての罪喰いが従うらしい。その力を利用して、人体実験でもしてるんじゃないかって噂だ」

「きな臭くなってきたな……。そういえば……」

サンクレッドさんがコロシア島を訪れた際、小さな単独で行動する罪喰いを討伐しました。

ひょっとしたら、あの罪喰いも人為的に生み出されていた可能性は否めません。

「その人型の罪喰いがコロセウムでも近々使用されるようでな。その戦士として腕の立つ人間を集めているらしい。それでゲートタウンにも人買いのピエロが来る可能性は高いと踏んでいる」

「なるほどな……」

好機。戦いの場であるなら、サンクレッドさんの腕を買われてユールモアに上がることが出来るかもしれません。近いうちに人買いが現れたなら、サンクレッドさんは迷わず立候補するでしょう。

「時に旦那は、なんだってユールモアに？ 俺たちみたいに生活に憧れてってわけじゃなさそうだが……」

「光の巫女を救出する」

「え!? 光の巫女っていうと、かつてユールモア軍と戦っていたあの少女……救世主ミンフィリアのことか？ 今もここにいるってのか？」

「この世界で彼女は、何度も転生し、その度に傷つき死んでいった。そうしてずっとこの世界を守ってきたんだ。どうやらこの世界での10年前に、何代目か分からないミンフィリアが現れて、ユールモアが保護したという情報がある」

「まさか……」

「何が保護だ、幽閉の間違いだらう。戦争をやめたユールモアだからじゃない、彼女を……戦いの呪縛から解き放つ」

「旦那はどうやら、俺の想像のはるか上を生きてるようだな……」

肩をすくめるシスから目を離すと、ユールモアを見上げながらサンクレッドさんは呟きました。

「俺はもう一度、君を救いたい……」

そしてサンクレッドさんは腰の刀を抜きました。何かを思い詰めるように、眉間にしわを寄せて鞘から抜くと、何も呟かずにただただじっと見詰めていました。

サンクレッドさんの胸中を押し量ることは難しいでしょう。イールに問うた正義を、改めて自分の中に問うているのかもしれない。

「おーい、サンクレッド！ 今日の稽古終わったぜ！ 短剣2本で、グランソンの大剣と戦うのめっちゃ楽しいな！ もう一息で当たりそうなんだ、もう一息……！」

すると、ライト村での稽古が終わったイールがゲートタウンへ帰ってきました。

紅い西日が指して、ゲートタウンのメインストリートをルビーレッドに染めます。お疲れ様と、イールを労うサンクレッドさんの耳に馴染みのない声が届きました。

「やあやあ諸君、コンニチワ！ 君たちにとっては幸運なことに、今日のボクらは大忙しだ！」

「来たか……旦那、あいつらだぜ」

サンクレッドさんは表情を引き締め、赤い衣の道化師と青い衣の道化師と対峙しました。

寂れたゲートタウンには似ても似つかない、サーカスを思わせるような煌びやかで上質な服を着ているピエロたち。

その様子は、ゲートタウンの住人たちから見れば定時連絡のように見慣れた光景なのかもしれません。自然と道化師たちの周りに集まる人々。

「この前は、コロセウムで戦う戦士を迎え入れたけど、今回はもっと強い戦士が必要になっちゃったのさ！」

「ささっ、我こそはという人は、名乗り出ておくれよ！」

サンクレッドさんは迷わず、道化師たちの前に歩み出ます。

「俺が行こう」

「サンクレッド……？」

イールが心配そうな声を上げますが、サンクレッドさんは振り返らず背中を向けるのみでした。

「へえ……自信ありそうだけど、腕前の方はどうかな？」

「何で証明してもらおうかな、とりあえ——」

道化師が言葉の途中で、サンクレッドさんは目にも止まらぬ疾さで道化師の間を通り抜けた……ように見えました。

抜刀するときの刃渡りの音がしたと思った次の瞬間には、道化師たちの背後で納刀したのですから。それだけではありません、道化師たちのピエロ帽子にぶら下がっている丸い球のような装飾品が一つずつ無くなっていたのです。

これからジャグリングを始めるかのように持ち上げて見せたサンクレッドさんに、道化師たちは認めざるを得ませんでした。

「い、いい……ね。試してみようじゃないか。せいぜい死なないようにね。さっそくユールモアに来てお仕事をしておくれよ！」

「あ～あ。この帽子高いんだけどなあ……」

こうして、サンクレッドさんは無事ユールモアに侵入することが出来るようになったのです。

「ちょっと待ってくれ。忘れ物がある」

「早くしておくれよ。大忙しなんだ」

そう言ってサンクレッドさんは、イールの元に戻ってきました。

「14日程度しか一緒に居られなかったが……お前は見違えるように成長してくれた。あとはグランソンやサイ・リュクの旦那、ライト村の人たちとうまくやっていくんだぞ。一度親御さんとここを離れてライト村で生活しろ。村長には話を通してある」

「サンクレッド……急すぎるじゃないか。まだ聞きたいこと、たくさんあったのに……」

「すまない……お前の成長を見届けてやれなくて。だが、俺の正義は今……ユールモアにある。そしてそのタイミングが今なんだ。心配ないさ、お前は強くなる。俺よりも」

「サンクレッドの、正義……」

「だから俺の剣をお前に託す。俺は今の……この戦い方を変える。今のままではダメだと分かったんだ。だから、この剣術を極めるのはお前だ」

「え……サンクレッドの剣、いいのか？ でも、コロセウムで戦うんだろ？ だったら武器は持ってった方が」

「大丈夫だ、俺に考えがある。闘技場なんだ、武器ぐらい貸してくれるだろ」

「……分かった。父さんに会ったら、伝えてくれ。帰ってくるときはライト村にて」

「ああ……元気でな、次に会うときは俺に見破られるなよ？」

「あ……おう！」

イールの肩をポンと叩き、道化師たちの元へ戻るサンクレッドさん。イールは、かつての父の背中と重ねていました。同じくしてユールモアに歩いていった背中を、自分も追いつけるようにと……。

そしていつの日か、並んで戦えるようにと……。イールにとって二人目の父のような存在は、血の繋がったライアンと同じ頼もしさを宿していました。

「それじゃ、さっそく愛と幸せの街、ユールモアにご招待だ！」

「おいピエロ、上に行ったら頼みたいものがある。武器くらい調達してくれるんだろ？」

「ボクたちは知らないよ！ 君の飼い主にでも聞いてみるんだね、気に入られたら安い武器でも買ってくれるんじゃないかな！」

「おおっと！ 忘れてたよ、メオル、メオルだね！？ もちろん分かっているとー！」

ゲートタウンの人たちは、その配給に群がり受け取っていきます。あるものは家族の分も受け取り、あるものはその場でむさぼっていました。

「ささっと配って、レッツゴーだ！」

歓迎の門に向けて歩き出したサンクレッドたちに向けて、イールが叫びます。

「サンクレッド！ オレ！ 強くなるからなー！」

「……おう！」

そうして片手をあげたサンクレッドは、大きな背中を受け止めるのでした。

サンクレッドさんたちが歓迎の門をくぐり、姿が見えなくなった頃——。イールは日課となった体力づくりの為に、廃船街をぐるりと一周するべく走り出しました。

走りづらい浜辺をあえて選んでの疾走は、これ以上なくイールの足腰を強化しています。そんな見慣れた浜辺を脱兎のごとく走っている時でした。

「……っと。ん？」

通り過ぎた浜辺に、自分の足音ではない異様な音が一つ……。

それは初め、軽い家具か何かが砂浜に落ちたような音だとイールは思いました。この廃船街では珍しいことではありません。

廃船街に住む人々の話では、ユールモアから時折降ってくるそうです。要らなくなった家具や、食料、そして……。

「なんだ……あれ……？」

イールが砂浜を引き返し、その異様な形をしたものに近づいていきます。

それは麻袋。少し大きめの、あれは……そう、小柄な牛が一頭入っているかのような大きさの麻袋でした。

しかし異様なのは、麻袋の口が開いているのです。開いているにも関わらず、ちゃんと縛られていました。どういうことでしょうか……？

イールの目に映った異様な光景、それは……。

「あ、し……？」

麻袋の口から飛び出しているのは、まさしく人間の足だったのです。

足が2本、ひざ下あたりから飛び出してしっかりとヒモは結わられています。

つまりこの麻袋には、人間が入っているということでした。それもあの高さから落ちたのですから、生きていた可能性はゼロに近いでしょう。となればあとは、誰の死体なのか……。

イールは恐る恐る麻袋のヒモをほどくと、足を持って袋を剥がしていきます。

途中、腕が露出したところでイールの動きが止まります。

「うそ……だろ……まさか！」

勢いよく袋を剥がすと、その死体を見たイールは何かが込み上げるように口元に手を当てて目を逸らしました。

「うっ！ んん……っ！」

その死体の顔は……耕されたのではないかと思うほど抉れ、骨も肉も削ぎ取られていたのです。

「うあ、あ……あ、あああああああああ!!」

絶叫したイールに廃船街の人々が何事かと近寄ってきました。

顔なしの遺体……。その人物が誰なのか、一体だれが判別出来ましょう。

稀に人が降ってくると、残酷な現実を見ることはありましたが、顔が潰されている遺体など今まで無かったようです。

住人達は口元を手で抑えて「ひどい……」と囁くばかり。そんな中、イールだけは表情が違って見えました。

「どうし、て……」

目に涙を浮かべて、遺体の手を握っていたのでした。

中指に光る指輪を見つめながら……。

「ひどい……。そんな遺体ひどいです……」

リーンが哀しい表情で両手で口と鼻を抑えながら、ハンナさんの朗読に感化されているようです。あなたはこの物語の結末を想起出来ているでしょうか。

「ブレイクタイムです。サンクレッドさんの残した物語……手記のようなものですが、このイールが見た死体のことはおそらく知らないでしょう。なぜならサンクレッドさんはこの後、ユールモアにてリーンさんを救出するのですから」

「……そうです。私はこの後、突然やってきたサンクレッドに救出してもらいました。私も、イールさんのことを知りません」

「あなたもそうですね？ イールという、サンクレッドさんから短剣を受け継いだ少年のことをここに誰かが記憶していません。戦い方を変え、ガンブレードに武器を持ち替えたのは丁度この時だったようです」

そしてユールモアでミンフィリア、リーンのことを救出したサンクレッドたちは旅をしながら時が立ち、ウリエンジェがいる妖精卿に一度身を寄せました。

しかし程なくして、リーンはサンクレッドの元を離れ、またユールモア軍に捕まってしまうのです。

「これが、あなたがこの世界にくる3年前の出来事です。そして次にサンクレッドさんが紡いだのは、それから2年後の出来事。つまり今から1年前に起こったライト村での凄惨な事件のことです」

「あ、サンクレッドから少しだけ聞いたことがあります。はぐれ罪喰いが村を襲ったことがある、と……」

「はぐれ罪喰い襲撃事件……その時どうやらサンクレッドさんは、ライト村に向かったようですね。再開しましょう、物語りを……」

そして時は2年後、つまり今から1年前のこと……。

あれからサンクレッドさんはミンフィリア奪還作戦を見事単独で完遂し、ミンフィリアと共にウリエンジェのいる妖精卿へと共に向かいました。

しかし、その半年後突如リーンはウリエンジェ宅を抜け出し再びユールモア軍に捕らえられ、ランジートのいるラクサン城に幽閉されてしまいました。

心を痛めるサンクレッドさんのもとに、とある事件が勃発したと水晶公より伝達がありました。

ひと時、縁のあったライト村が襲撃を受けているそうなのです。しかしそれは単なる罪喰いによるものではなく、数年前噂されていたはぐれ罪喰い……四使徒の内の一人デュカイオシュネーがライト村を襲っているとのこと……。

単なる罪喰いの襲撃であれば、グランソンたちや成長したであろうイールたちが持ちこたえているはず。しかし、情報によれば大罪喰い並みの強さを誇る四使徒です。であればサンクレッドさんであっても、苦戦は必至の相手。放ってはおけないと、迷わずサンクレッドさんはライト村に向かいました。

——家々は燃え、罪喰いと化した人々がさらに村人を襲い罪喰いと化す。そんな地獄絵図が、眼前に繰り広げられていました。

サンクレッドさんは、顔を歪めつつ最初の希望は断たれたと感じ、残るは被害をこれ以上増やさないことを念頭に足を走らせました。

「イール！ イールッ！ いないのか！？ クソッ！ なんだってこんな時に！」

この村には魔物退治を生業にして腕の立つ剣士だっていたはず。それがこんなにも簡単に罪喰いの侵入を許したのでしょうか。

サイ・リュクの話では、村の安全のために交代で監視もしているとのことでした。それが、何も機能していなかったのです。

気が付けば火の海……。村内を闊歩している罪喰い達は、村を守ろうとした剣士たちか、それとも無抵抗のままやられてしまった村人なののでしょうか。

ひと先ず、数を減らさなければ被害の拡大は防げません。サンクレッドさんは、背中中のガンブレードを構えなおし罪喰いを薙ぎ払ってゆきます。

「フッ！ おかしい、一体何があったんだ……。グランソン…そうだ、グランソン！ あいつも一体どこに……。グランソン！ サイ・リュクの旦那！ 誰かいないのか!?」

かつては村人だったであろう罪喰いたちを倒しながら、燃え盛る家々にまだ生き残っている人はいないかと、屋内にも目を広げます。

「おい…嘘だろ……。ミランダ……ミランダ！」

建物の陰から男性の声。その声の主は、果たしてグランソンでした。

「グランソン！ これは一体どういう……」

サンクレッドさんは閉口せざるを得ませんでした。

建物から飛び出したグランソンの視線の先には、ミランダの姿がありました。しかし、次の瞬間、人型のはぐれ罪喰いがグランソンの目の前で、ミランダの背中を切りつけたのです。

目の前の光景がスローモーションのようにゆっくりになり、ミランダの身体は羽根のようにふわりと地面に倒れ込みました。

グランソンは彼女を抱きとめることも出来ず、ふらふらとした足取りでたどり着き……膝をつき、伏したミランダの身体を優しく抱き起します。

「ミランダ……ミランダ……！ 返事をしてくれ！ ミランダ！」

「グラン…ソ……」

「ミランダ！ 良かった、今手当てをするからじっとしてるんだ」

「もう……遅い、よ……。どこ……行ってたの……」

「ごめん、君の依頼の……あ、あの依頼を手伝おうと思って、ほら道具を……かり…て…」

グランソンは分かっていました。彼女を抱きしめた時に、背中に大きな刀傷が肩から腰に掛けて深く、荒々しく伸びていることを……。

涙声はもう弱々しく、どうにもならないことを予期していたのです。

「そん、な……こと…より……。傍に、居て……ほ……しかっ……た、な……」

「ごめん、ごめ……ん……」

「くっ！ このッ！」

サンクレッドさんは人型のはぐれ罪喰いに飛び掛かろうとしましたが、別の罪喰いと応戦し反応が遅れました。

その間に、人型のはぐれ罪喰いは何かを拾い上げ、燃え盛る家々に一瞥もせず闇の中へ消えてしまいました。すると、他の罪喰いたちも倏うように飛び去って行くのでした。

「ガッ……あああああ！！ ガッフ！ ゴホッ！」

苦しむ彼女を、グランソンは離しませんでした。しかし、罪喰い化を止めることは出来ません。姿を変えたミランダはグランソンの腕を離れて、浮遊しました。

何かを訴えるようにグランソンを見下ろす彼女は、一体どんな胸中だったのでしょうか……。

サンクレッドさんはミランダの死期を悟り、せめて彼女が他の誰も傷つけないようにとグランソンに声を掛けました。

「グランソン……彼女の最後の願いを、叶えてやれ」

分かっている、愛する人を貫くことのなんと罪深いことでしょう。

「なんで……なんでだよ！ どうしてこんな、ことに……！」

「グランソン！」

グランソンはゆっくりと背中中の剣に手をやり、目に涙を浮かべながら、咆哮しました。

「ミランダ……くっ……あああああああアツツ!!!」

無念の咆哮。グランソンの慟哭は、村全体に響き渡るほどの悲痛な叫びとなって木霊しました。

その言葉に呼応するかのように、ミランダの身体は光となって霧散しました。

「……よくやった」

「うっ……くっ……そ……。オレが、傍に居たなら……こんなことには……」

「グランソン、お前は今まで……いやそれより、これはどういうことなんだ。村の警備は？」

グランソンやきっと成長しているだろうイール、そして熟練のサイ・リュクたちが多少の罪喰いならば跳ねのけていたでしょう。こんな甚大な被害が出たということは、おそらく……。

「グランソン、被害状況を確認しろ。村の外に逃げている人の把握と、監視が機能していないとなると、サイ・リュクの旦那が心配だ。俺はクリフトルのおっさんを……ん？」

視界の端に目をやると燃え盛る炎の中、ふらふらと足元のおぼつかない少年が一人、村の中央に佇んでいました。

両腰に見覚えのある短剣を差し、小柄ではあるが足腰のしっかりした構えをもつ少年……。あの姿はまさしく、イールの風貌をしていました。

「イール……？ ケガはないか！ お前をさが——！」

サンクレッドさんが違和感に気づくのに数瞬遅れていたら、きっとガンブレードを抜くことはなかったでしょう。

今まで誰もいなかった場所に、突然現れたのではないかというほどに音もなく出現したのです。

そしてイールの放つ異様なオーラ……。まるでそれは、先ほど消えた人型の罪喰いが放っていた邪気のようにもあります。

刹那、イールが消えてサンクレッドさんの目と鼻の先に襲い掛かってきたのです。躊躇いもなく双剣をサンクレッドさんの喉元に食らいつこうというところで、ガンブレードを抜刀したのでした。

「くッ！ お前、イール……なのか？」

双剣とガンブレードの鏝迫り合いの最中、サンクレッドさんはイールの目を見ました。

瞳は漆黒に染まり、まるで人型の罪喰いを見ているようでした。

「サンクレッド！ ……イール!？」

「グランソン、大丈夫だ。ここは俺が何とかする！ グランソンは、旦那と村長を探して村人を非難させてくれ！」

「わ、分かった！」

駆けていくグランソンを横目に、サンクレッドさんはイールの刃を弾きます。

「これは……どういふことだ？ イール、お前もしかして……」

「……」

「イール！ 答えてくれ、一体何があったんだ!？」

倒壊する家を背に、イールは双剣を握った右手を顔の前に持ち上げると……。

「ッ！ 消えたッ!？」

イールは風に弄ばれる火花に紛れ、姿を消しました。刹那、サンクレッドさんの背後から双刃旋の構えを見せるイール。

瞬時に弾いて間合いを開くサンクレッドさんは、違和感を覚えます。

「だまし討ち……いや違う。あれは双刃旋の動きだった……。かくれた訳じゃない？ どういふことだ……？」

サンクレッドさんの教えた動きに、何か違う動きが重なっているのです。隠れたというよりは、消えたといった方が正しいかもしれません。

かつて、イールの持つスピードは目を見張るものがありました。

しかし、サンクレッドさんには捉えられるものでした。それが、目で追えないほどの疾さにまで成長したのでしょうか。

分析をしながら戦うサンクレッドさんは、こんな状況にも関わらず少しの嬉しさを覚えました。

「嬉しいよ、イール。それがお前の”双剣術”なんだな……。速すぎて、俺には目で追えない……。だが!」

イールの動きはとても直線的で、基本的。サンクレッドさんの教えを忠実に守り、研鑽してきたであろう動きなのはサンクレッドさんには手に取る様に分かりました。

剣閃を弾き合う中で、それはいつしか、かつての稽古を思い出させるようでもありました。

「あいつの動きは確かに早い……。目では追えないが、攻撃に転ずる瞬間に必ず姿を捉えられる。勝機はそこしかない……」

それでもサンクレッドさんは次第に哀しい表情に変わりつつあります。

目の前にいるイールは、もうかつてのイールではないのですから。成長した嬉しさと、もう二度とあの日々は戻らないと悟った悔悟を、ガンブレードで振り払いました。

「……ならせめて、弟子の引導は師が贈ってやらないとな……」

イールはもう、罪喰いだったのです……。

先ほどの四使徒と同じ、人型の罪喰いと成り果てていたのです。どうしてイールがそうなってしまったのか、なぜこの村がこんなことになってしまったのか、サンクレッドさんには分かりませんでした。

それでも、これ以上被害を広げないためにも、ここで討伐しなければなりません。覚悟を決めたサンクレッドさんはガンブレードのトリガーに指を掛けました。

カモフラージュで受け流し、ブラッドソイルにて装填……流れるようにブラステイングゾーンを打ち下ろしました。

「これで……終わりだ!」

爆風に乗せてイールの身体は吹き飛び、ライト村の地面に転がったのです。

罪喰いの姿になってもなお、イールの両手にはかつてサンクレッドが託した双剣が握られていました。歯はボロボロに欠け、柄の部分は何度握りしめたか分からないぐらい布切れのほつれが顔をのぞかせています。

「ずっと、俺の剣を……。イール、お前は俺の手で……」

「ガァァァァァ!!」

罪喰いと化したら、倒す以外に方法はありません。

もがくイールの叫びが怒りではなく、悲しみとなってサンクレッドの胸中を揺らします……。

進む剣戟が、かつての己の剣閃と見紛うほどだったとサンクレッドさんは回想していました。その|撃|撃を弾きながら、2年前稽古を重ねた情景をサンクレッドさんは思い出していたのです。

この身のこなし、身体全身を使った旋風、その一つ一つがサンクレッドさんのギューゲスを鈍らせていました。

しかし、己と同じ動きだからこそ、その癖も次の剣戟も予測できます。

「イール……。お前の成長も、お前の努力も、お前の正義も、近くで見届けたかった。俺は、失敗してばかりだな、師匠失格だ……。お前が苦しみの先に、英雄へなりたいたいと願った想いをこんなところで終わらせはしない。あいつが込めてくれたソウルで、お前を倒す。それが俺の、新たな戦い方だ！」

(守り方)

サンクレッドさんのギュゲスは、ガンブレードの軌跡となってイールの身体を貫きトリガーを引きました。

すると、イールに覆われていた邪気のオーラが霧散して肉体を眩い光が包み込みました。

ゆっくりと目を開けたイールは、自身の視力が失われていることを悟ります。何かを求めるように片手を伸ばしますが、その手を掴んだのはサンクレッドさんです。

優しく抱き起こし、腕の中でイールを見つめます。

「……すまなかった。イール」

「謝る、のはオレ……。だ。もっと、強く……。なりたかつ……。た、なあ……」

「イール、お前は強くなった。お前と剣を交えてよくわかったよ」

サンクレッドの言葉を聞いて、イールは初めて破顔しました。

「オレ、英雄に……。りた……。った……」

「ああ……」

「サンク、……。ド……」

もはや、息しかきこえない声を、サンクレッドはイールの口元に耳を当てて、聞いた。

「っ……。イール、お前……」

光が霧散して、イールの身体はエーテル界へと登っていきました。その輝きは、燃え盛るライト村の炎に照らされてスターライトとルベライトに煌めいていた。

「サンクレッド！ 安全な場所にみんなを避難させてきた！ あれ……イールは？」

サイ・リュクを連れてグランソンが帰ってきました。

クリフトルの姿はありませんでしたが、どうやら避難した人たちと一緒にいるのだそうです。かわりに、サイ・リュクの腕の中にはユーリスがいました。

「四使徒は去った。……。被害は、甚大だ」

そうつぶやいたサンクレッドさんは、イールが横たわっていた地面に目を落としていました。

麦畑を眺めて佇むサイ・リュク、打ちひしがれるグランソン、泣き崩れるユーリス……。

そんな3人を背に、サンクレッドさんはユールモアを見上げたのでした。

「おかえりなさい。サンクレッドさんの物語はここまでのようですね」

この書物では、様々な謎が明かされずに結ばれました。顔のない死体、中指に光る指輪、イールの遺言……。さらには、四使徒はなぜライト村を襲ったのかなど、大なり小なり気になった部分があるかと思えます。

サンクレッドはどうして、このような謎めいた書物を残したのでしょうか。ひょっとしたら、あるいは……。

「あなたなら、この物語の真相を知っているのではありませんか？」

「……あなたが？」

「リーンさん。実はここに、こんな書物があります」

「え、白紙……。？ 背表紙はあるのに、タイトルもなければ中身は全部なにも書かれていません！」

「そう。これは、タブラ・ラーサという白紙の秘蔵書。すべての叡智が集まるとされる、かの“アカシアの記録”にすら貯蔵することが許されなかった禁書。なぜかという、アカシアの記録には過去も未来も含めてすべての理が集積されますが、この禁書は過去でもなく未来でもなく、今ここにしか存在しないからです」

「えっと……。つまり？」

「……あなたはもう、お気づきではないですか？」

それは、存在しないモノ。転じて、まだ生まれていないものなのです。だからこそ、ここであなたが語ることをしないならば、この物語は……

”存在しない”のです。

「もしも、あなたのギュゲスが囁くならば……。今ここで、私がリーンさんに朗読しましょう」

「そ、そんなこと出来るんですか!? だって、まだ紡がれていないのに、ハンナさんがそれを読むなんて……」

信じられないといった表情のリーンの頭をそっと撫でると、落ち着いた表情でハンナさんはあなたに語りかけます。

今この時、その裏側にあるだろう真実を語るも語らずもあなたの正義の赴くままに。

ギュゲスの理に従い、そのリングを内側に回すのならば真実であろうと、偽実であろうと、ここに記されハンナさんが語るでしょう。

「私はアドボカシー。この鈴の音が、魔法の始まり……。ですよ」

珍しく少しおどけた表情で小首を傾げるハンナさん。リーンはそんなハンナさんの様子に、優しそうに微笑んだ。

「では……」

タブラ・ラーサを開いて、その上に左手を差し出したハンナさん。あとはあなたが、その手の上に左手を重ねるだけです。

リン……。あなたが手を重ねると、真空管を通した鈴の音が辺りを包み込みました。

……。分かりました。あなたの知る真実を、あなたのギュゲスが囁くならば……。

そして辺りは、白い霞の中に包まれたように再び物語の世界へと移ってゆきました。

ここは、ゲートタウン——。

辺りを見渡すと、あの青い衣の道化師と、赤い衣の道化師たちがサンクレッドさんをユールモアへと誘っているところでした。

「俺の剣をお前に託す。俺は今の、この戦い方を変える。今のままではダメだと分かったんだ。だから、この剣術を極めるのはお前だ」

「あ、ああ……。！」

イールの肩に手を置いて、力強くうなづくサンクレッドさんはイールの胸中に何かが芽生えるのを感じたのかもしれないですね。

握りこぶしを作って軽くポンと、イールの胸を叩きました。

丸腰になったサンクレッドさんは、イールに大きな背中を見せて、ユールモアへと歩いていきます。

「おいピエロ。武器の一つや二つ、調達してくれるんだろうな」

「それは君の飼い主に聞いてみてください。ボクらの知ったこっちゃないです」

ボヤクサンクレッドさんの背中に、かつて臨んだ父親の背中を見たイール。

イールの英雄は、とても強い人でした。みんなから信頼もされていました。そして、軽口も叩けるような陽気な人でもありました。

陰気な自分には無い陽気さも、まだ非力な自分にはない強さも。父の背中とはとても遠く、とても大きかった。いつか自分もあの背中に追いついて、肩を並べて戦いたい。

いいえ、背中を預けてくれるようなデカイ男になって認めてもらいたい。それがイールの、ギュゲスだったのです……。

「サンクレッド！ 次に会うときは、オレが勝つからなあ！」

「……おう！」

ゲートタウンのメインストリートを歩いていくサンクレッドさんたちを見送り、イールは日課となった廃船街一周全カダッシュのために、駆け出しました。

ドスン……！

砂浜に何か落ちたような音がしました。それははじめ、着替えの入った荷物を砂浜に放り投げたような音だとイールは思いました。

しかし、その物音に目をやると、イールの目はえぐれそうになるほど見開いていたのです。

それは、異様な形をしていました。何かの資材が詰め込まれた麻袋かとも思いました。……いいえ、それはとても細長い形をしています。

その輪郭は細長いようで、ある形に似ている気がしました。でもそんなハズはありません。それが”そんな風に”入っていることなんて、今まで見たことがなかったからです。

そのまま結び目の方に目をやると、もうそれが何なのか……脳が拒否をしてもソレ以外に考えられませんでした。

麻袋から生えているのは……足……。見紛うことなどありえません。人間の、……足なのです。

麻袋の形はそう、人間の上半身のような形をしているのです。ありえない、ありえない……。イールはその異様な光景に不気味さと恐ろしさを同時に抱きながら、唾を飲み込みました。麻袋の中に人間が逆さまに詰め込まれているなんて、見たことがなかったのですから……。

頭から肩幅に広がり、大きな背中のようなゆるやかな隆起を眺めながらそのまま真っすぐと結び目まで、降りると……何度でも言いましょ。麻袋から生えているのは、間違いなく足……。

スネのあたりから飛び出している足は、膝の下あたりで麻袋の口に結われ砂浜に落ちてきたのでした。

落ちてきた……？ 上にあるのは、ユールモアです。するとつまり、ユールモアから落ちてきた以外にありえないのです。

……聞いたことがある、とイールは胸中で思いました。華やかな生活とは裏腹に、下の世界から上がってきた者たちが飼い主の愛想をつかすと、知らぬ間に消えてしまうと。そして何事もなかったかのようにまた別の者がそこにいるのだと……。

死体など見つからない。死んだことすらなかったことにされてしまうのだから……。

それすなわち、ユールモアにはもう肉体はないということ。だからこうして、海に沈まずに浜辺に打ち捨てられた魚のように、人の目に触れてしまうことだってきっとあるのでしょう。

「……なん……だ……？」

頭では結論を出したところで感情が追い付いていないように、確かめてみるまでそれが何なのか分からないフリをするイール。

重石を付けていないにも拘わらず、トレーニングの為に負荷をかけているかのように愚鈍に感じる足を1歩、また1歩と砂浜を引きずるように前へ出すイール。

「はあ……はあ……」

過呼吸に陥りそうになりながら、麻ひもに手を伸ばす。

『何をそんなに動揺してるんだ。死体ぐらい、見たことだってあるさ……』

そんな虚勢のような言葉で頭を埋め尽くします。

なのに、何か警鐘を鳴らしている。頭に響く鈴の音のような、甲高い音。

その残響が紐をほどいて勢いよく袋を剥がした瞬間に、消えました……。

「うそ……だろ……」

その服装は、イールの英雄でした。3か月前、ユールモアのコロセウムに意気揚々と登って行った父の姿に似ていました――。

「うっ……」

しかしイールは最後のところで、父親であることに抗いました。なぜならその骸の顔は、判別できないほど損壊していたのです。

破壊された顔面を直視できずに、吐き気を抑えながら視線を落とすと、その遺体の中指に見たことのあるリングが通されていました。

それはまさしく、イールの父が愛用していたリングだったのです。裏を返せばそれが、この遺体がイールの英雄であることを物語っていました。

「そ、んな……父さん……」

イールはそっと中指から黄金の指輪を外しました。握りしめながら、イールは涙を零します……。

「誰が……こんなことを……くっ、うう……うあああああああああああ!!!」

内に怒りと復讐を宿すイールの咆哮に、廃船街の住人達が何事かと集まってきました。

「と、どうした？ イール。今日は走るのやめ……」

こうして死体が多くの人に発見されました。ゲートタウンの人々もやってきて、服装や体格からそれがイールの父であることが囁かれました。

「これが……指に……」

この時イールは、遺体から外したリングを皆に見せました。この死体が父親である証であると……。その後、母親がやってきて遺体に覆いかぶさるようにして泣き崩れました。イールは涙を流しながら放心したようにその光景を眺めていました。

目標であった父が死に、いつか自分も上の世界へ行って父に認めてもらいたい。そんな目指すべき背中が無くなってしまいました。目標がないのなら、消えてしまいたい……。いっそのこと……。

サンクレッドさんから託された剣術、それはすべて父のように戦える力が欲しかったからに他なりません。倒したいのは悪魔でも罪喰いでもない……。負かしたかったのは、父……。目指したのは父の背中……。

もしも倒したい相手がいるのなら、それは……父を殺した犯人、いや……その元凶はコロセウムです。ユールモアなのです。イールは知っていました、どうやらその発案は元首ヴァウスリー。

「……オレの仇は、あいつだ……。そう、ヴァウスリーを殺す……。でもどうやって？ 上に行くにはゲートを通らなきゃいけない……。……あの場所を通り抜けるにはピエロと一緒に上がる以外に方法はない」

うわ言のように呟くイールの呪言……。それは近くにいた母にも聞こえているかもしれない。それでも影になって見えないイールの表情はきつともう、涙は消えていたでしょう。

「クソ……ッ！ またあいつらを待たなきゃいけないのか？ それまでじっとしてるしかないってのか？ 父さん……オレは、どうしたらいい……？」

……この時イールは、無意識にリングを自身の中指に通していました。そして呪言を呟きながら、そのリングを回したり外したり弄っていました。

だからなぜ、自分の呟きが周りに聞こえていないのかも分かっていませんでした。

「っ……」

そして、ふいにイールは違和感を覚えたのです。自分の手が見えない……いいえ、消えているということに……。先ほどからイールは無意識に指輪を弄っていながら気づいていなかったのです。さすったり、外したり、回してみたりしていると……。ふとした瞬間に、指輪に触れた瞬間、イールの身体は透明化したのです。

「ど、どういう……ことだ」

様々試しているうちに、イールは突き止めました。このリングを中指にはめて、内側に回すと透明化し、外側に戻すと解除するということに……。

「この指輪に、そんな力が……。これならひょっとして、ゲートを潜り抜けられるんじゃないか……？」

突然手に入れた力に、不思議な高揚感と万能感を得たイールは己の胸中に問いかけました。

悪魔のささやき……。確かにこれを使えばゲートを突破できるかもしれません——。

しかしいいのか……？

バレたらどうなるか分からない。理由は分からないが、ひと一人殺して上から突き落とすような連中だぞ。コロセウムの闘士としてピエロに連れられて行った父さんが殺されたのだとしたら、顔を損壊してゴミのように捨てられたのだとしたら……。

オレも同じように、殺されるのは必至。だが、刺し違えたとしてもヴァウスリーを殺すのが目的だ。

気がかりなのは、母さん……。母さんを残してオレが死んでしまうようなことがあれば、とんだ親不孝者になっちゃう。はは……。今までさんざん親不孝してきたじゃないか。

でも、父さんが死んだ今、母さんの悲しみは深い。目の前で泣き崩れている母さんの背中は今まで見たどんな背中よりも小さい……。

ヴァウスリーを殺し、オレは生きて帰る——。

その為に、父さん……オレに力を貸してくれ。今のままでは襲撃以外の勝機はない。父さんですら負けてしまうような相手がいる魔窟に、単身一人乗り込んだ所で無駄死にだ。だから……1年だ。ヴァウスリー、お前に執行猶予をやる。

父さんのこの力を借りて、オレの剣術を極めて、父さんより強くなってやる。

誰も知らずにヴァウスリーを殺し、何事もなかったかのようにライト村に帰る。それが、オレが目指す場所……。

——それからイールは、透明化を織り交ぜた剣術の修行に勤しむことになったのです。すべては、復讐の為……。

一方、ユールモアではコロセウム会場でヴァウスリーが罪喰いと闘士の戦いを見物していました。

「なんだト？ 我がユールモアの庇護を断るとは、馬鹿な男ダ」

「……どうしますか？」

「いやいい、放っておけ。あんな小さな村、勝手に滅ぶだろウ」

「各地で様々な村が崩壊しております。巷では悪名高い”四使徒”

などと呼ばれているそうです。……そのうちあの村も餌食になるでしょう」

「……愉快愉快。私の最高傑作たちが、各地で噂されているのは愉快ダ」

「ヴァウスリー様、一つ小耳に入りたい話が」

「ン？ なんだ？」

「今戦っているあの男……どうやらライト村の出身のようです」

「なあにいいい？ 忌々しい……忌々しい……さっさと負けてしまえばいいもヲ……ン？」

「どうしました？」

「お前、その腕輪……」

「ああ、これはかつてスカベンジャーがフツブート王国から盗み出したもので、商人の伝手を使って私が買い取ったのですよ」

「……。そういえば…、あのガルジェントの騎士は確か、かの妖精国に縁ある者だったナ」

「……？ ヴァウスリー様？」

「……フフ、分かったゾ。だが、今じゃあないナ。勝手に奴が襲撃して滅びるもよし。しばらく泳がせてみよウ。いずれ時が来たらお前にも動いてもらおう。それは私が預かっておく」

「分かりました、これが“双頭狼の牙”です」

ヴァウスリーは不敵な笑みを浮かべ、宝物を受け取りました。この会話がいつ行われたものなのかは定かではありません。

しかしこの時、ヴァウスリーが浮かべた醜悪な笑みは悲劇の始まりだったのかもしれない……。

それから1年が経ち、イールは一段と成長しました。この1年でどんどん頭角を表し、グランソンとも肩を並べるようになります。

持ち前のスピードと、好戦的な双剣術により魔物狩りを生業とするグランソンとも意気投合し、たまに現れる弱い罪喰いには負けられないようになっていました。グランソンと共に魔物狩りに出かけることもあり、実戦経験も着実に積んでいました。

……機は熟しました。イールは復讐を決起した夜、母の寝室に向かいます。

「母さん、聞いてほしいことがあるんだ」

「イール、どうしたの？ 改まって」

「父さんが死んだって言われて、オレ悔しかった。英雄だった父さんが負けるなんて信じられなかった。今でもひょっとしたら、上で戦ってるんじゃないかって思ってる。けど、あれから1年帰ってくることはなかった」

「……そうね」

「オレに剣を託してくれた人が言ってたんだ、オレの正義はどこにあるんだって。オレはやっぱり今でも、父さんを殺したユールモアが許せねえ。だから、今は何も言わずに聞いてほしい」

「……」

「ここまで育ててくれてありがとう。親不孝ばかりしてごめん。でもオレ、前より強くなった。だから……今日オレがしようとしてることを、止めないでほしい」

「いつか、そんな日が来るんじゃないかって思ってた」

「え？」

「あなたの英雄はいつだって父さんだったよね。その目標がいなくなっって腐ってしまったのは分かってたよ。だから、剣を持って新しい目標が出来て、変わったあなたを見て母さんは嬉しかった。だから止めない、母さんも同じ気持ちだから」

「母さん……」

「でも一つだけ……。ちゃんと帰ってきてね」

「……ああ！ ありがとう、母さん……」

そうつぶやいて、イールは中指の指輪を内側に回しました……。

暗闇に乗じて、下層に位置する【樹根の層】はあっけなく突破したイール。

当然かもしれません。誰にも気取られないのは、この指輪のおかげなのです。これまで絶対的な制約の下で生きてきたイールにとって、こんなにも簡単にそのルールを打ち破れることは、人生の否定でもありました。

こんな大きな力があるのなら、誰でも上に行ってしまうではないか……。そう思ったとき、イールのギュゲスは釘を刺します。

かつてこの指輪の所有者であった父は、それを出来たにも関わらずしなかったのです。それを思えば、自分はその禁忌を犯してしまったのではないかと今更ながら焦燥感に駆られます。

しかし、全ては復讐の為……。今日のことはすべて無かったことになります。誰にも気づかれずにヴァウスリーを殺し、何事もなかったかのようにライト村に帰る……。その為に1年間爪を研いできたのですから。

勇み足になる自分の足を叩き、喝を入れました。

それからしばらく、住人たちの会話を聞きながら中層に位置する【樹幹の層】にて、コロセウムに辿り着くことが出来ました。

その現状を……。いいえ、惨状を見てイールは絶句するしかありませんでした。

「なんだよ……。これ……」

イールが見た光景、それは戦いとは名ばかりの一方的な罪喰いによる虐殺でした。数人の人間たちが同時に入場してきては、罪喰いが致命傷を与え、闘士たちは次々と罪喰いに姿を変えてゆきます。

さらに数の増えた罪喰いたちを前に、新しく人間たちがやってきては殺されて……。

ユールモアの庇護下にあるゲートタウンですら、罪喰いに襲われることはありません。ここに住む市民たちは、こんなにも多くの罪喰いを前にして恐れることなどありえないのです。

むしろ、弱き人間たちが無残にも罪喰いに姿を変える様を見てエンターテイメントであるかのように歓声を上げています。

「狂ってやがる……！」

ひょっとしたら、イールの父ライアンもいくら強かったとはいえ、あっさりと敗北してしまったのかもしれませんが。そんなことが脳裏を過り、イールはかぶりを振りました。

「こんなの、戦いでも何でもねえ……。クソ……！」

コロセウムの現状を目の当たりにしたイールは、心を滾らせて憎悪の表情で歯ぎしりするのです。こんな悪夢を見せられて、それが余興かのように沸き立つ観衆を見て、イールはこれが皆の夢見た世界だったのかと絶望したことでしょう。

そして、そんな世界で命を奪われてしまったであろう父のことを思うと、さらに心は激しく黒く燃え上がりました。

全ての元凶がヴァウスリーであると復讐を誓ったあの日から、1日も忘れたことは無かった怒りの感情を、イールは唸ることで更に強固にしていきました。

コロセウムを後にしたイールは、さながら影の復讐者。

すでに腰から双剣を抜き、いつでもヴァウスリーの喉元に飛び掛かれるように低い体制で疾駆しました。

先ほど聞こえた会話で、ヴァウスリーは最上層にある【樹葉の層】にいることは分かっていました。誰にも見つかることなく、足音もなく、イールは階段を駆け上がっていきます。

そしてついに、ヴァウスリーの居る部屋の扉の前までやってきました。

「……いる」

扉はなぜか隙間が空いていて、息を殺しそっと中を覗き込みました。ヴァウスリーと誰かがいます。身なりから商人であることが伺えます。

「そうか、ようやく出来たナ……」

「はい。なかなか苦勞しましたが、良い出来栄えかと……」

「フム……」

透明化しているイールは、商人が邪魔になって手を出しあぐねていました。

だまし討ちするのは容易いでしょう、しかし自分がゲートタウンへ降りる間に死体が発見されては、警備が殺到し、門を閉じられてしまうリスクがあります。

それを懸念し、なるべくヴァウスリーが一人になった時を狙おうと、しばらく息を潜めることにしました。しかし……。

「……おい。誰が部屋に入って良いと言ッた？」

「……？」

「お前じゃな、そこのねずみダ」

イールはハツとして息を飲みました。ここまで誰にも気づかれなかったのに、なぜヴァウスリーには感づかれてしまったのでしょうか。

ひょっとしたら自分ではないかもしれないと一縷の望みを懸けて息を潜めていたイールですが――。

「インスロール・アイ……」

「ッ！」

ヴァウスリーとイールの視線が交わった瞬間、イールの透明化が解け目視できるようになってしまいました。

「誰だお前は！」

「クソッ！ こうなりゃヤケだ！」

見つかったのなら仕方ありません。ヴァウスリーの首を切り、海に飛び込む覚悟をもって、疾駆したイール。

しかし、その刃を受け止めたのはヴァウスリーではありませんでした。

「……と、父さん……？」

「……」

イールの疾さに追いつき、剣を受け止めたのは父ライアンの姿をした何者かでした。

しかしその瞳は漆黒が宿り、邪気を帯びたオーラを放っていました。それはまるで、人型の罪喰いのようでもありました。

「馬鹿め、バニシュなどくだらなイ……。おっと、そういえばこいつもそんな戦い方をしていたな。丁度いい、ねずみを殺せ」

「……ヴァウスリー様、こいつ今”父さん”と……。この男は確か下界から連れてきたライト村出身の剣士だったはずですよ」

「なにい？ ……つくづく私に齒向かってくるというの力。忌々しい、忌々しい……」

「と、父さん！ 生きてたのか!？」

「さて……その男は生きていられるのでしょうか、ふふふ……」

「父さんに何をした！ ぐっ！」

イールの剣をはじき返した人型の罪喰いは、大剣を構えなおしイールと対峙しました。

そして、重心を低くした刹那、風のように消えて次の瞬間にはイールの背後で振りかぶっていました。

「なん……！ それは、もしかして……」

すんでの所で刃を交わしたイールは、混乱していました。
目の前に現れた、父ライアンと同じ姿をした人型の罪喰い。そして消えたように見えて次の瞬間には背後に現れる動き。
それは本当に、イールの持つ指輪の透明化の戦い方に似ていました。

「その指輪……どうして!？」

「……」

罪喰いは話さない。しかし、中指に光る金の指輪は確かに父ライアンと同じものだったのです。

……では、今イールの持っている指輪は一体誰のものなのでしょう。いいえ、ライアンがあの人型の罪喰いなのだとしたら、あの日ユールモアから振ってきた黄金の指輪をした死体は一体誰のものだったのでしょうか……。

イールの頭に疑問符が満たされていきます。その間、罪喰いは何度もイールに飛び掛かってきました。消えては現れて、消えては現れてイールの死角を襲う。

目で追えないような速さなのは、元々備わっているスピードに拍車をかけて相手を翻弄する動きへと転化します。その戦い方は、地上でイールも身に着けた戦い方でした。

だからこそ、次に狙って来る死角も手に取る様に分かりました。

「本当に……父さん、なのか……？ こんな、ことって……」

「愉快愉快。父に殺されるか、父を殺すか……。さあ、選べエ！ ねずみい！」

イールは父の攻撃を交わし、弾き、受け流します。

その戦いは傍から見れば、写真1枚1枚を順番に見ているかのような、瞬きをする度に別のところから現れる二人の映画を見ているようでもありました。

戦術は同じ、武器は大剣と双剣とでは次第にイールが力負けしていきました。

今のイールは、確かに強くなりました。それでも、罪喰い化によって人並み以上の体力を得たライアンよりイールの体力の消耗は大きかったのです。

「重い……」

大剣の重さと、父の力の前に屈しそうになるイール。

もうここまで来ると、イールにも分かっていた。かつての父は、もう居ないと……。願わくば、こんな風に父と戦う未来もあつたかもしれない。

しかしそれは、罪喰いではなく人として。あの陽気で、強くて、大きかった父の背中を今こそ超えなければ……。

「さよなら、父さん……」

イールはサンクレッドから譲り受けた双剣を、一度鞘に納めました。

それは戦意喪失したからではありません。最後の一撃を、最大の一撃にするために。

イールの脚力は、指輪の透明化を使わずとも縮地の領域にまで達していました。ライアンが切り掛かってきた瞬間、イールの残影は真っ二つに割れました。

刹那、ライアンの頭上からイールの終撃が襲いました。

「……オレ、父さんより強くなったよ」

光に包まれるライアンの身体は、邪気が払われほんの少し残っていたらうライアンの魂が姿を現しました。

「強くなったな……イール」

「父さん……」

「すまない。母さんを置いて、お前に何も残してやれなかった」

「……」

「お前に一つだけ、伝えたいことがあつた」

「なに……？」

「強さが、いつも正義であるとは限らない……」

「え……？」

「強さは、己を滅ぼすこともある。お前の正義が、強さを求めたなら何も言わない。だが……母さんを、守ってやって欲しい……」

「守るための、強さ……」

「そうだ、強さなんて……大切な人を……守れるだけで、いい……」

「……父さん!？」

イールの英雄は、光となって消えました。

父の言葉を反芻するイールに、強欲な力が迫っていることに気づけるはずもありませんでした。

「かっ……はっ……」

イールの胸を貫いたのは、間違いなくヴァウスリーでした。

満身創痍のイールは、超反応も俊敏な足腰も疲弊していてもまさかこんなタイミングで狙われるとは露とも思ってなかったのです。

しかしそれはヴァウスリーが初めから狙っていたことでもありました。ねずみ1匹、ヴァウスリーにとって再起不能にすることは造作もないことでした。

それが幸か不幸か、縁のある者同士の戦い。これは余興とでもいわんばかりに、高みの見物と決め込んでいたのです。

「……んふふ。機は熟し夕。お前には働いてもらうぞ、ねずみい……」

「か、からだ、が……ぐ、うおおおおおおお!!」

イールは漆黒の渦に飲み込まれ、叫び声が収まると同時にイールの瞳は漆黒と化していました。

「……」

「お前はこれから、これを持ってライト村の彫金師を尋ねるのダ。修理依頼とでも言えばいい。報酬はたーんと弾んでやレ」

「……ハイ」

……こうして、イールは帰郷を果たしました。手には「双頭狼の牙」を携えて……。ヴァウスリーを殺すという復讐を果たせぬまま、傀儡となって宝物をミランダへと渡したのです。隣には、あの日ヴァウスリーと話していた商人の姿もありました。

身なりを変え、罪喰いと化したイールは傍目には、本人であると気づくのは難しかったのでしょうか。

ましてや、いつも稽古をしていたグランソンならまだしも、あまり接点の無かったミランダには突然舞い込んできた大口依頼だったのです。舞い上がるミランダには、それが他人の空似に見えてしまったのです。

「ねえグランソン聞いて！ 今回の依頼、報酬がすごいの！ よっぽど高価な代物なのね……。どこかの王族が付けていた腕輪なんだから。金額聞いて驚くよ～？ 私、この依頼を達成出来たら結婚資金に当てるの！」

「おいおい！ そんな大口依頼なのか？ 一人じゃ大変だろう、オレも道具を借りてくるからさ、手伝うよ」

「いいのいいの！ それより、新居の方クリフトルさんと相談しておいてよね！」

「はは、分かったよ。無理すんなよ」

「うん！」

幸せそうな会話の影に、悲劇は顔を覗かせていました。

その次の日には、ヴァウスリーの思惑通り四使徒はフツブート王国の宝物を回収しにやってきたのです。

あとはサンクレッドさんの見た地獄絵図……。

サイ・リュクさんは四使徒の姿を知りませんでした。罪喰いであればすぐにでも討伐を差し向けたはずです。

しかし、はぐれ罪喰いは人型でした。それが強大な力を持つ罪喰いであるとは知らず……。無警戒にライト村への侵入を許してしまったのです。

燃え盛る家々、次々と罪喰いへと変えられてしまう村人たち……。ライト村が半壊寸前の頃、サンクレッドさんはライト村にやってきました。

ミランダは四使徒に討たれ、宝物を奪われました。駆け付けたグランソンも間に合わず、目の前で罪喰い化したミランダを自らの手で……。

建物の影で、イールはサンクレッドの姿を見つけます。四使徒と、罪喰い化した村人だった人たちが立ち去る中、イールだけはその場に残っていました。

なぜイールは、罪喰いになりながらもサンクレッドのことを視認出来たのでしょうか。

「サンク、レッド……」

『次に会う時は、オレが勝つ……』

『次は俺に、見破られるなよ……』

イールの胸中には、かつてサンクレッドさんと交わした言葉が去来します。姿形は、分かる者なら見破れるほどの変化しかありません。しかし、イールの意思は、正義は……もうどこにあるのか分からなくなっていました。

「イール……？ ケガはないか！ お前をさが——！」

傀儡となったイールは幾ばくか残っていたであろう自我を、表に出そうとしますがうまくいきません。それはヴァウスリーによる刻印が強力だったせいです。

「くッ！ お前、イール……なのか？」

「……」

「これは……どういうことだ？ イール、お前もしかして……」

「……。……」

「イール！ 答えてくれ、一体何があったんだ!？」

あとはもう、獣のようにサンクレッドさんに襲い掛かる罪喰いでした。憎しみも、悲しみも、正義の胸中も……。イールはすべてを、灰にしてしまいました。

サンクレッドさんに討たれるまで、イールの暴走は続きました。本人ではもう、どうすることも出来なかったのです。……父を自分の手で殺し、ヴァウスリーを仕留めることが出来なかったから匙を投げてしまったのでしょうか？

いいえ、イールはユールモアに上がる直前、母と約束していました。また、母のもとに帰ってくると……。優しく送り出してくれた母の言葉を、イールが自ら反故にするはずはありません。

それほどに、ヴァウスリーの力は強大だったのです。

「……すまなかった。イール」

「謝る、のはオレ……だ。もっと、強く……なりたかつ……た、なあ……」

「イール、お前は強くなった。お前と剣を交えてよくわかったよ」

仰向けに倒れたイールを優しく抱き起すサンクレッドさん。彼の腕の中で、イールは心なしか安心した表情を見せました。邪気が払われ、動かない身体にもどかしさを覚えつつ、近くにサンクレッドさんを感じイールは最期の言葉を紡ぎます。閉じた目には、サンクレッドさん以外にも誰かが映っているのでしょうか……。

「オレ、英雄に……りた……った……」

「ああ……」

「サンク、レッド……」

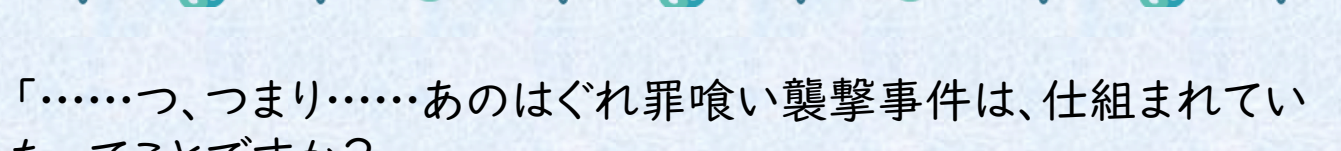
もはや、息しかきこえない声を、サンクレッドさんはイールの口元に耳を当てて、聞きました。

「っ……。イール、お前……」

サンクレッドさんの表情は、前髪に隠れ窺い知ることは出来ませんでした。光が霧散して、イールの身体はエーテル界へと登っていきます。その輝きは、燃え盛るライト村の炎に照らされてスターライトとルベライトに煌めいてました。

グランソンが戻ってくるまで、サンクレッドさんは地面に膝をつき、消えた英雄に寄り添うようにただじっと地面を見つめていました。

己の胸中に、正義を問いかけながら——。



「……つ、つまり……あのはぐれ罪喰い襲撃事件は、仕組まれていたってことですか？」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれません。その証拠に、ほら……」

あなたがハンナさんと繋いだ手を離すと、タブラ・ラーサはなんと……白紙のままでした。

一体どういうことでしょうか？ ハンナさんは、あなたの力を使って朗読をしました。それはつまり、同時に執筆していたのではなく、あなたを超える力によって視ていた光景をそのまま話した……ということでしょうか？

「事実は小説より奇なり。ここに記されなかったのなら、それは存在していないのです。リーンさん、この物語は確かに一つの可能性を見せてくれました。しかし、もしそれが本当だったとしても、サンクレッドさんは見ていないのです」

「……だから、サンクレッドの書いたお話は、ただただ哀しい事件が起こっただけ……？」

「そういうことです。ひょっとしたら、この人はとても意地悪で、本当はイールは加担していないかもしれませんがよ？ もしくは、英雄ライアンは生きているのかも……」

「え？ で、でもそうすると……」

「ふふ。もちろん、私が曲解して話しただけかもしれないですけどね……？」

「可能性……？」

「可能性とは、時に恐ろしく、時に便利な言葉で、時に人を前向きにさせることもあります。それが真実であろうと偽実であろうと、受け取り方はあなた次第。そして、一つの解が示されたからといって、想像の余地はたくさんあります」

「あの、私、思ったんです。もし本当にイールが腕輪をライト村に持ってきてしまったのなら、四使徒が現れたのがその翌日。一晩、イールには時間があつたはずなんです。イールは、お母さんに会ったのでしょうか？ それとも、ただ闇の中で、孤独に過ごしたのでしょうか……」

「……そうですね。その晩の出来事は、紡がれませんでした。そしてサンクレッドさんは、あなたにこの時のことを話さず、書物に記しました。それはどうしてでしょうか？」

「……救えなかったから……？」

あなたは、どう思うのでしょうか？

事実、フツブート王国の宝物「双頭狼の牙」がライト村に渡り、ミランダが犠牲になり、デュカイオシュネーが村を半壊させました。……それしか分かりません。

そこに誰の思惑があったのか、イールは最期サンクレッドになんと伝えたのか、いやそもそも、イールという人物は本当に居たのでしょうか？

「それが、物語を愛するもの全てが共有する”ギュゲス”なのかもしれないですね……」

「ブラボー！ 今回も素敵な朗読でした、ありがとうございますハンナさん！」

「……ですから、あなたは読後感……もういいです。リーンさん、あなたも。今回の朗読はいかがでしたか？ 禁書を使った朗読はリーンさんにはちょっぴり早かったでしょうか。気に入って頂けたらまた呼んで下さいね」

「あ、読後のコーヒーをお持ちしますねー！」

「あ、ありがとうございます！」

ハンナさんは、リン……と足音を響かせながらいつもの席へ戻っていきました。

リーンも会釈をすると、自分の席に戻っていきます。コーヒーを受け取ったモーレンさんはハンナさんとリーンに渡すように指示し、あなたの分だけ持ってきたようですよ。

「……お疲れさまでした。……どうぞ、読後の余韻を楽しみましょう。少し、私の独り言に付き合ってもらえるでしょうか？ ああいや、巻末だと思ってください」

今回もモーレンさんはあなたに話しておきたいことがあるみたいですね。

早速相席しましょう。読後感に浸るために……。

「さて、今回あなたが気になっているのは……そう、ワイルドカードのことですね？ 作中の出来事や、タブラ・ラーサのことは今回良いスパイスだったことでしょう。その思考の余地は、また別の機会に楽しむとして。今回はどんな仕掛けが施されていたのかを説く前に、ひとつ不思議に思ったことは無かったですでしょうか？ 事件も起きて、顔なしといえど死体もあるのに、どうして前回と違い戦犯はイールだという可能性を印象付けたのでしょうか。もちろん、裏で糸引いているのはヴァウスリーだったということを前提にですが……」

ある意味、これは一つの解答だと言っているようなものでした。当然ハンナさんは真実の中に隠された、あったかもしれないヒトカケラの小さい真実も救いたいと願う読み手です。

最後に可能性として濁しましたが、前半と後半を重ね合わせれば、視点を変えて一つの大きなストーリーになっています。

つまり、可能性の一つを示した、とも言えます。

「重ねて、今回もどこかに”嘘”の要素を探していたかもしれませんが、残念ながら今回のお話の中で嘘というワイルドカードを持った人物はいないのです。では今回、どんなカードが存在していたかということ……“正義”です」

作中でも多く登場した、正義という言葉。

それは個々人によって定義の違う言葉でありましょう。イールの宿した正義、サンクレッドの抱える正義、そして……。

あなたはもう、うっすらお気づきかもしれませんね。問いかけられていたのは、あなたの正義だったのです。

「タブラ・ラーサ。あの書物には何も記されていません。ゆえに、存在しない物語を無限に紡ぐことが出来ます。……そう、この禁書の上であなたはハンナさんと手を重ねましたね。その時ハンナさんは、託したのです。あなたに”正義”というワイルドカードを……」

少し分かりづらかったでしょうか。

あなたの持つ超える力を使って、ある一つの可能性を見ました。それをハンナさんは朗読したのです。しかしあなたはひょっとしたら、違う光景を見ていたのかもしれません。

それはあなたの正義に従って、真にも贋にもなるのです。ハンナさんの朗読した世界が真に見えたのならあなたのギュゲスはそう囁いたから。

しかし、あなたは別の光景を想像し、ハンナさんの朗読はまやかしに見えたのなら、あなたのギュゲスがそう囁いたからに他なりません。

「今回は、リーンさんもいました。つまり受け手があなたではなく、リーンさんだった時。リーンさんにとってはハンナさんの朗読が真になるわけです。もちろん、それも可能性の一つとして諭しました。その中で思考してほしかったからです。イールという少年が、自身の正義と向き合いながら、父を殺すこと、自身が災いの元凶になってしまうこと、それでもどこかに彼のギュゲスがあることを、リーンさんなりに受け止めてくれれば良いのです」

この物語は、ダブルスピーク。かつて起こった事象を、受け手の印象が変わる様に言葉を選び装飾すること。

はぐれ罪喰い襲撃事件のことは、グランソンやユーリス、ライト村の人たちが証明するでしょう。しかし、そこに誰の思惑があったのか、どうしてミランダが修理依頼を受けることになったのかは類推の域を出ません。

この一つの、事実という物語を柱としたとき、ユールモアにリーンを助けに行くサンクレッドが居合わせてライト村に縁のある人物がヴァウスリーの反感を買い、その人物が災いをもたらしてしまったとしたら……という想像の余地も生まれるのです。

それでも、この物語が存在するかしないかは分かりません。あなたは、そこに居なかったのですから……。さりとて、このダブルスピークには様々な矛盾は付きものです。

ライアの肉体が人型の罪喰いの方だとしたら、顔なしの死体は一体誰だったのか。そして同じ指輪をしていたのはなぜなのか。もともと指輪は2つ存在していたのか。それもすべては猫箱の中……。

「そういえば、サンクレッドさんは最期にイールから何て言われたんでしょうね。あなたもぜひ、想像してみてくださいね。ハンナさんが伝えたかったのは、真実は否定するものではなく、ひょっとしたらそんな世界もあったかもしれない……その想像の余地は、どの物語にも存在する。あなたにとっての正義は、あなたが決めて良いのです。それが彼女の……朗読する者の”愛”なのですから」

モーレンさんは立ち上がりました。読後の余韻とやらは、楽しんで頂けたでしょうか。そんな短いようで濃厚な、コーヒーが温かさを残している間だけの贅沢な時間をあなたにも感じて欲しかったのでしょうか。

「そうそう、あなたはもうお気づきですか？ この物語には、もう一つの可能性があるということ……。事実と朗読、そしてもう一つ。あなたの中にハンナさんは、もう一つの可能性があることをちゃんと気づいていましたよ。なぜなら今回、鈴の音は”3回”鳴りましたからね。これだからハンナさんの朗読は一度聴いたらファンになってしまうんです。……では、私はこれで。あちらの世界に戻っても、良かったらまた、いらして下さいね」

そう言ってモーレンは、よく分からない球体の機械の前へと戻っていきました。

さて……。いかがだったでしょうか？

もう少し、読後の余韻——想像の余地——を楽しむのも良いでしょう。そのコーヒーが温かい内は、想像の熱も冷めないでしょう。

そういえば、想像ではないですが、”思考”の余地を楽しめる書物が博物陳列館にあるそうですよ。

【母の小指と、約束の指輪】というタイトルです。

ぜひ探してみてくださいね。

それでは、また気が向いたときにでも想像の旅へいらして下さいね。

あなたのお越しを心よりお待ちしております。



あしがき

改めまして!! Final Fantasy XIV新生7周年おめでとうございます!
(半年前!)

皆様ごきげんよう。7周年記念小話も無事(?)脱稿することができました。年々遅れて本当に申し訳ありません。。
誰かが待っているのか、忘れ去られているかもですが、すでに己との闘いに突入しているシリーズ企画ですが、14が続く限り喰らいついでいきたい! そう思っております。
『創作は、どこまでだって続いていく!』って彼も言っていましたからね。
今回も7周年記念小話「父の背中と、正義の胸中」を最後まで読んでくださり、ありがとうございます。

私信です。
誰かが言っていましたね。漆黒秘話という“黒薔薇”を公式さんが投下してしまったと……。
漆黒秘話・後半戦も楽しく読ませて頂きました。本当に、本当に……描かれなかった人たちの過去や想いがこういうところで読めるのはすごくありがたいです。
色々な過去に思いを馳せることが出来ました。
今回の小話も、漆黒秘話の末席に添えて頂けたら幸いです。

さて、前回に引き続き舞台は「博物陳列館」。
二人称というテイストも、暁のメインキャラを掘り下げるのも、漆黒に則した感じにまとめられて、個人的には満足しています。
今回のタイトルも、前作に寄せたものにしたかったので、良い語感になったと自負しています。

あと、いつも考えていることですが、ゲーム内で出てきたクエストを絡めたいと思っています。「陽明り〜」もそうなのですが、ネタバレ御免ではあるのですが、今回もタンクのロールクエストと、ライト村の長めのサブクエストの内容を含んでいます。
これらをしっかり回収している人には、ここが何か繋がっているのではないかと考えた人は多い気がします。
私はメインタンクなので、グランソンのことはすごく印象に残っていました。それと同じように、ライト村でのユリスを中心としたサブクエストもすごく好きな雰囲気だったので、色々考えているうちに次の舞台はここにしようと思っていました。

時系列を調べているうちに、ひょっとしてこの頃、サンクレッドがコルシア島に居たんじゃないか…と思うようになって、そうであるなら前回のアリゼーに続いて、今回のメインキャストはサンクレッドで行こう、と相成りました。

でもここで、せめて時系列には反しないようにしようと思って、分かっていることの“隙間”を考える日々が続きました。
逆に言えば、隙間を埋めるストーリーを考える必要があります。そうなったら、あとは妄想全開でした(笑)
結果、パーツが出来上がってくると、まるで右手と左手を組むようにピッタリと重ねることが出来ました。

あとは少しの喜劇性も欲しかったので、前半と後半とでプロットを分けて……サンクレッドがガンブレッドに持ち替えた経緯、リーンが知らないサンクレッドの弟子、デュカイオシュネーがライト村を襲った理由、ヴァウスリーの暗躍、そういうものを描いてみました。

もちろんそれは遠因としての可能性なので、あったかもしれない物語になります。
朗読という味付けを施すなら次なるワイルドカードを用意します。
ちなみにこの「ワイルドカード」ってカードゲームとかで使われる“特殊な役割”を持ったカードを指すのですが、それをキャラクターに対して持たせるというシステムとはある体験型ゲームでも使われたりします。
個人的に好きなスパイスです。お楽しみ頂けたでしょうか?

あと、ミステリーというより今回はサスペンスに近かったかもですが、多くの謎をそのまま残してあります。それは想像の余地として、お楽しみください。

それでは! 次は8周年記念小話ですが、「END WALKER〜暁月の終焉〜」の後にお会いしましょう。おそらく冬! 今年こそ年内に!(笑)

最後に恒例の叫びを置いて筆を置きましょう。
なっちゃんに届けー! この想いー! 6.0シナリオめっちゃ期待して待ってまーす! 織田さんの絵本も買います!

ではまた8周年でお会いしましょう。

Rumuh鯖 Yuura.Erisell

【新生エオルゼア】

『[言行録](#)』 『[見聞録](#)』 『[近思録](#)』

【蒼天のイシュガルド】

『[蒼天秘話](#)』

2周年記念小話 『[明かされなかった信実](#)』

3周年記念小話 『[届けられなかった音義](#)』

【紅蓮のリベレーター】

『[紅蓮秘話](#)』

4周年記念小話 『[始まりの狼煙は、紅い杯](#)』

5周年記念小話 『[陽明りの奇跡は、海の灯](#)』

【漆黒のヴィランズ】

『[漆黒秘話](#)』

6周年記念小話 『[母の小指と、約束の指輪](#)』

7周年記念小話 『[父の背中と、正義の胸中](#)』

【Special Thanks】

SQUARE ENIX様

FinalFantasyXIV様

FREE-LINE-DESIGN様

And... You!!

[感想・連絡フォームはこちら](#)

この物語はFF14の二次創作物です。本編とは何ら関係はありません。
しかし、スクウェア・エニックス様より申し立てがあった場合は
即刻掲載を取り下げることをお約束致します。

記載されている会社名・製品名・システム名などは、各社の商標、または登録商標です。

Copyright (C) 2010 - 2021 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.